

「訪中を終えて考えたこと」

「相互理解」

3 A 北陸大学 阿部汐栞

私は大学で中国語を専攻しており、日頃から中国の言語や文化、歴史について学んできた。その中で、中国に対する興味は次第に深まり、「いつか自分の目で中国を見てみたい」という思いを強く持っていた。一方で、私の家族や周囲には、中国に対して否定的な印象を持っている人も少なくなかった。「危ない国なのではないか」という声や「マナーが悪いのではないか」といった声を聞くたびに、違和感を抱いていた。だからこそ、今回の訪中プログラムは、大学で学んできた中国文化や人々の姿を、自分の目で確かめる貴重な機会だった。この7日間で訪れた、上海、山西省、北京は、どこも深い歴史と豊かな文化にあふれていた。上海でのナイトクルージングでは、ライトアップされたギラギラとした街並みの美しさに感動したとともに、近代都市としての中国の姿を感じ、中国の発展と勢いを肌で感じた。山西省の平遥古城では、明や清の時代の街並みに触れ、時代を超えて残る人々の暮らしを感じた。雲岡石窟では、巨大で精巧な仏像の影刻に圧倒され、中国の宗教芸術の奥深さに魅了された。約1500年前に造られた雲岡石窟がこれほどまでに美しい状態で現代に残されていることに驚かされた。北京の万里の長城では、実際に登ってみて、写真や映像では伝わらない壮大さを全身で感じた。こんな場所に、どうやって、これほどのものを造ったのか、当時の技術や労働の実態についてより興味を持った。

そして一番心に残っているのは、現地の大学生たちとの交流である。文化交流会では、太極拳の演武や伝統劇、踊りや歌の発表があり、どれも自国の文化と誇りをもって披露する姿が印象的だった。私たち日本の学生も、書道、歌やダンスの発表を通じて日本文化の魅力を伝えることができた。中国人学生との交流では、自分から中国語で積極的に話しかけるように心がけたところ、「中国語、上手ですね!」「もっと話したいです!」と笑顔で返してくれたことが本当に嬉しかった。言葉が通じたことで一気に距離が縮まり、互いに自然と心を開くことができた。何人かの学生とは連絡先も交換し、帰国後もメッセージのやりとりが続いている。今までの学びが実際の交流につながったことに大きな達成感を感じた。

今回の訪問を通して、私は「まず相手を知ろうとすること」「実際に会って対話すること」の大切さを痛感した。日本と中国は文化的にも歴史的にも深いつながりを持つ隣国であるからこそ、誤解や対立ではなく、若い世代が交流を通して理解を深めることが今後ますます重要になってくると感じた。この7日間での経験で私自身の視野と考え方は広がったと思う。これからも中国語の学習を続けながら、今回の経験を活かして、互いを理解し合える関係を築いていきたい。そして、ネットやテレビの報道では見えない中国の人々の温かさや思いやりに触れた経験を自分の言葉で周囲に伝えていくことで、周りの人が持つ中国に対する考え方も変わり、より良い関係の構築に貢献したいと思う。

訪中を終えて考えたこと

十文字学園女子大学 新井鈴奈

今回、訪中国に参加したことは私にとって生涯忘れることのない、かけがえのない経験になりました。参加のきっかけは、中国人の友人との交流や、友好関係を気づいた経験から生まれた「もっと中国の事を知ってみたい」という素朴な思いでした。しかし、実際に中国を訪れ、現地の空気を肌で感じ、長い歴史の足跡を自分の目で見て、現地の人々からさまざまなお話を伺う中で、中国に対する印象は大きく変わりました。例えば、立ち並ぶ高層ビルやキャッシュレス決済の普及などからは、中国の経済発展の速さを感じました。また、歴史博物館を訪れて中国の長い歴史や日中関係の歩みについて学んだことで、中国に対する理解がより深まり、訪中の意義を再確認することが出来ました。また、中国の方々のホスピタリティにも心を打たれました。私がこれまで出会ってきた中国人の友人も皆、優しくおもてなしの心を大切にしている人ばかりでした。中国の方々が相手の事を大切にしている姿勢が現地でも感じられ、とても魅力的でした。また、中国の学生との交流会では、中国での大学生活についてのお話を伺っただけでなく、好きなドラマや音楽などの話で盛り上がり、同じ学生同士の親しみやすさと、国が違っても同じものに関心を持っているという親近感を感じることが出来ました。まさに、「百聞は一見に如かず」。実際に中国を訪れなければ見る事の出来なかった景色を沢山見ることが出来て非常に貴重な経験になりました。

今回の訪中では中国の魅力と人々の温かさに触れ、とても有意義な六日間でした。私がこのような素晴らしい経験は多くの方々のサポートなしでは得る事が出来ませんでした。また、この経験を通して自分がこの先社会を支えていく貴重な存在である事を自覚しました。最後になりますが、この貴重な経験を周りの人たちに共有し、一人でも多くの人が中国に興味を持ってくれるといいなと感じております。

この度は貴重な経験を誠にありがとうございました。

「本物の中国に触れて」

3-A 静岡文化芸術大学 伊藤里桜

今回の7日間の訪中国では、上海、山西省、北京の3都市を訪れ、中国の文化や経済について触れることができた。私が訪中国に参加した理由は、実際に中国を訪れ、SNSやメディアを介さず、実際に中国を訪れて文化や日常生活を直接体験するためである。私は普段、大学の講義やゼミで中国の文化や経済について学んでいる。そうした学びを通して、中国に対して「経済が発展し続けている国」、「日本が戦争してまでも必要とした国」という印象を持っていた。一方で、メディアやSNSの情報から「反日運動」といった否定的な印象を持っていた。しかし、実際に7日間中国に滞在し、自分の中部ある中国の印象をアップデートすることができた。

7日間の訪中を通して、特に印象に残っていることは、電子決済サービスと会社の広告に関する体験である。まず、電子決済サービスについてである。中国は、日本と比較して電子決済が非常に普及しており、多数の店舗で電子決済を利用できた。昨年の7月に放送されていた中国のニュース番組で、「外国人観光客がアリペイなどの電子決済サービスを使用し、外国のカード会社を紐づけるためには複雑な手続きを行う必要があり、一人では設定ができないため、現地の人に協力してもらう必要がある。これを受けて多くの訪日外国人が迅速な改善を求めている」という情報を見たことがある。しかし、今回の訪中国に参加した5月時点ではこの問題がすでに解決されており、電子決済サービスを快適に使用することができた。この経験から、中国の電子決済サービスの利便性の高さと中国企業の開発力、対応力の素早さを実感することができた。次に会社の広告についてである。私が中国を訪れて最初に驚いたことが、中国企業の広告の掲載の仕方と大きさである。1日目に体験した上海の遊覧船で、さまざまな企業が自身のビルの壁面にプロジェクションマッピングによつ大規模な広告掲示を行っている光景を見ることができた。日本ではあまり見かけない光景がとても印象的であった。このような広告の規模から、中国企業の経済力の大きさを感ずることができた。

このように、日本と中国は隣国でありながら、実際に訪れてみると異なる部分が多いことを肌で感ずることができた。中国は、常に発展し続け、日々成長を遂げている。その過程には、日本企業や多くの日本人が関わりながら経済活動を行っている。経済発展のスピードや生活文化など、実際に中国に訪れないと感ずることができないことを今回の訪中で多く学ぶことができた。これにより、日中間の関係構築の重要性について改めて考えることができた。

一方で、日本と中国には共通点があることも分かった。それは「人の温かさ」である。「中国は怖い」「中国人は反日派が多いから危険である」といった否定的な印象は、滞在中には感ずることはなく、日本人に対してフレンドリーな人が多かった。バスガイドさんやホテルのスタッフ、中国人学生など関わった多くの方が日本人に対して好印象を持って接してく

れたことがとても印象に残っている。メディアや SNS で見かける情報は一部を切り取ったものであり、必ずしも正しい情報ではないということを実感することができた。

今回の訪中団への参加を通して、自分自身が持っていた中国のイメージをアップデートすることができた。団長がおっしゃっていたように、日中関係をより良くしていくためには、一人一人が「本当の中国」を知り、互いを尊重し合っていくことが非常に重要だと強く感じている。

最後に日中友好協会をはじめ、今回の訪中に関わってくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。今回の貴重な経験を今後の人生に活かし、日中友好に貢献していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

ありのままで感じた中国

3-A 明治大学 稲垣和由

初めに、今回のような訪中の機会を作っていただいた日中友好協会をはじめとした関係各所、そして私を推薦していただいた県協会に感謝いたします。

この訪中団では、上海・山西省・北京を訪れ、各地で中国の歴史や文化に触れつつ、多くの同世代の日中両国の学生と交流することができたため、非常に充実した一週間となりました。今回の訪中にあたっては、初めて中国を訪れることもあり、「中国という国をありのままで感じる」ということを意識して臨みました。その中で、日本とは異なる中国の長い歴史と文化の偉大さはもちろんのこと、中国の経済力に伴う科学技術の浸透を感じました。

まず、各地で街の特徴が大きく異なっていた点が印象的でした。上海は経済都市として多くの超高層ビルが立ち並び、経済力の高さを感じさせました。これら高層ビルは一つ一つが特徴的な形をしており、東京のように似たビルが連なっているわけではないため、街中や船から見た光景は鮮明に記憶に残っています。上海における超高層ビルのほとんどは企業のオフィスであり、マンションなどは少なく見えました。また、それら企業の多くが銀行や保険会社であり、経済の中心として金融系企業が乱立している光景は、印象的でした。

一方、山西省は中心地においてはビルやインフラが整っているものの、郊外に出ると雲崗石窟や平遥古城のような歴史的建造物が残る落ち着いた都市でした。雲崗石窟は写真で見ただけより壮大でありながらも、一つとして同じものがない繊細な職人技を感じました。平遥古城では、高い城壁に囲まれた街並みが古くからの姿をとどめており、非常に印象に残りました。さらに、平遥古城は観光地としてだけでなく、現在も城壁の内側で生活している人々がいること、そしてその様子が城壁の上から見えたことにはとても驚きました。このような地方に残っている人々のほとんどが高齢者であり、若者は都市部へ出て働いているため、地方の過疎化が非常に進んでいるように見受けられました。

北京については、バス移動が多く車内からの印象ですが、街並みが京都のように碁盤の目状になっており、日本でいう省庁が立ち並んでいる様子から、政治都市であることが垣間見えました。

次に、各地を訪れる中で日本との文化や生活の違いを感じました。日本との違いの一つに、食文化の違いがありました。毎回の食事が豪華で、食べきれないほどの量が提供されたことには驚かされました。日本で、もてなす時には基本的においしく食べきれぬ量、もしくは品質の良いものを少量ずつ提供するのが普通ですが、中国では、あえて多くの料理を提供することが習慣のようです。また、日本風にアレンジされていない本場の中国料理には、初めて口にするものも多く、非常に興味深いものでした。二つ目に、科学技術の浸透についても強く感じました。街中を走る自動車やバイクのほとんどが電気自動車で、市

街の交通量は日本以上であるにもかかわらず、エンジン音がないため比較的静かでした。また、生活の中での決済はすべてスマートフォンによる電子決済に対応していました。日本であれば、スマホ決済に加えて現金やカード決済も一般的に使用でき、スマホが使えなくても生活できます。しかし、中国では店舗の規模に関わらず、町の個人商店から大型店に至るまで、すべてスマホによる電子決済が主流でした。ここから、中国で生活していくには、日本以上にスマホが手放せないと感じました。

今回は「中国という国をありのままで感じる」ということを意識した一週間でしたが、ニュースや SNS で知ることはできない、日本と同じ漢字圏として似ている部分やまったく異なる部分など多くのことを感じることができました。また、同じ号車で生活を共にした仲間にも恵まれ、さまざまな会話を通して刺激を受けると同時に、記憶に残る非常に楽しい訪中となりました。今回の訪中は今後の学びや仕事に活かしていきたいと思える、貴重な経験になりました。最後に、このような機会を与えてくださった関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

実際に中国を訪れてみて

3-A 東北大学 今井啓翔

私は今回、中国の上海・山西省・北京を訪れ、中国の歴史や文化について学ぶ貴重な経験を行うことができた。現地での文化体験や大学生との交流を通して、教科書や映像では学べないリアルな中国の姿を感じ取ることができた。

最初に訪れたのは、中国の経済と商業の中心地・上海である。高層ビルが立ち並ぶ現代的な街並みは、日本の都会とは全く異なっていた。上海では、街全体が洗練され、発展の勢いを肌で感じることもできた。特に印象に残っているのは、夜に体験したクルージングである。黄浦江を船で進みながら眺めた夜景は、とても美しく、幻想的な時間を過ごすことができた。次に訪れた山西省では、たくさんの中国の歴史に触れることができた。特に印象に残っているのは、雲崗石窟である。ここでは、中国の仏教文化を感じることができ、偉大な芸術心を奪われた。巨大な石仏や精緻な壁画は、大昔に造られたとは思えないほど綺麗に保存されており、当時の雰囲気を感じることができた。信仰と芸術が融合した空間に直接訪れることで、人々が宗教や文化に注いだ情熱を肌で感じることもできた。

また、山西大学を訪問し、地元の大学生たちとの交流の機会を得た。そこであった学生は、勉強している日本語を頑張って話してくれて、自分の興味がある日本文化についても教えてくれた。同世代の若者たちと意見を交換し、知見を広めていくことはこれからの日中関係をより良好にしていくためにとても重要であると感じた。

旅の最後には、首都・北京を訪れた。北京では、中国人民大学を訪問し、現地の学生たちが披露してくれた伝統舞踊や太極拳に触れた。しなやかで力強い動きの舞や、ゆっくりとした流れの中に集中力を込めた太極拳は、中国の力強さと華麗さを兼ね備えた文化を学ぶとても良い機会になった。学生たちの動きからは、中国の歴史や哲学、精神性を感じた。私たちのために時間を割き、温かく迎えてくれた現地の学生との交流は、言葉の壁を超えた心の通じ合いを感じる貴重な時間だった。

また、北京では世界的に有名な万里の長城を訪れた。実際にその場に立ってみると、写真や映像では感じられない壮大さに圧倒された。果てしなく続く石の壁と、急な坂を歩くうちに、当時の秦の皇帝の権力の強さが窺えるととともに、その皇帝の遺体に応えたいという市民の信念の強さを感じた。万里の長城はただの観光地ではなく、国家と民族の歴史を物語る記憶の遺産であると深く実感した。

この旅を通じて、私は中国の「多層的な顔」に触れた。歴史の重みを感じさせる雲崗石窟や万里の長城、伝統文化を大切にする若者たち、そして近代化の象徴である上海の街並み。どれもが中国の一部であり、中国の大きさをを感じる良い機会となった。

また、現地の人々との交流を通じて、メディアが発信しているのはほんの一部にことであり、そういった意見に惑わされることなく、自分の信念を持つことが大事だと感じた。国や言葉は違っても、互いを尊重し合えば心が通じ合う。そう感じられたことは、旅の中で得た一番

大きな学びだった。

これからも、今回の経験を胸に、さまざまな国や文化に目を向けながら、自分の視野を広げていきたい。そして、異文化を理解し尊重する姿勢を大切に、国際社会の一員として成長していきたいと思う。

訪中を終えて考えたこと

タイトル 「日中交流会の意義」

3A 上智大学 内海あかり

正直私は今回の日中友好大学生訪中団は好奇心故に参加し、心持としては旅行気分が主だった。私自身は、身内に中国に関係のある人がいるため特に中国に対しては可もなく不可もなくの印象であり、特に変な期待もしていなかった。しかし、いざ実際に参加してみるとその豪華さと、それに伴う中国側の負担の大きさに驚いた。ホテルの質やバスや高速鉄道での移動など、個人で旅行に行くとしたらまずしないであろう量と質のスケジュールだった。町中を見る限り多くのホテルらしき高層ビルが犇めいており、その競争率の高さからか日本より遥かに安価で良いサービスを受けることができた。ただ、とはいえ中国の中のホテルとしては上位の物であったのは間違いないと確信している。

では、そこまでして日本側の、私たちだけでない300人もの青少年を負担してまで受け入れようとしたのはなぜなのか、とふと疑問に思った。交流会でのスピーチなどを見るにやはり、日中関係が政治的には常に安定しているわけではない中で、若い世代の人々がステレオタイプの印象の悪い中国というイメージを定着させないためなのだと思う。そもそも中国は世界のマジョリティーを占める資本主義国家ではないながら世界第二位の経済力を有し、世界中に多く滞在しながら共通のSNSプラットフォームなどをあまり持たないので、何が正しい「中国」という姿なのかがわかりにくい。その長い歴史と多くの人口からあまりにも広い幅があるため、いい意味でも悪い意味でも捉えにくい部分があるのだと思う。

今回のスケジュールやプランを見るに感じるのは、中国の歴史と人やサービスの温かさを強調したかったように思う。多くの都市や場所に訪問するためどうしても物理的に移動時間が長くなり、それぞれの場所を満喫できたのかといわれると少し怪しい部分があるが、一週間という短い滞在期間でこれほどの予定を100人で回らせる手筈を整えるのは容易ではない。それでも多くの都市を巡る予定を組んだのは、中国の一側面ではなく、それぞれの都市から共通点と相違点を見出してほしかったからではないだろうか。中国というのは、日本のメディアやSNSが見せている側面だけでなく、普通に暮らしている人々がいること、とても発展していて技術に優れていること、伝統的な歴史的建造物が残っていること、そして日本とも長く交流があり続けているということがあるという多角的な側面を見せてくれたのだと思う。

そのような目的から考えれば、この訪中団というものは私たち青年参加者にとって非常に貴重で、かつ有意義なものであったのは間違いないと思う。ただ、同時にまだ底が知れないな、とも強く感じた。中国人青年らとの交流時間は短く、一緒にご飯を食することもできなかった。想定していたよりも受け身な交流であったがために、もてなされている、という感覚は終始あった。とても楽しく各都市を巡ることはできたが、何を知れたのか、

といわれると正直あまりはっきりしないのだ。より日中関係の改善や友好関係を築くという意味では、一般の旅行客にはできないような、日中学生間の交流を増やし、個人個人とのつながりを作ることに注力してもよいのではないかと思った。ただ、もちろん現状の段階でも友人を作ることにはできたし、素晴らしいパフォーマンスなども見ることができ、とても素晴らしい機会と経験をいただけたと思う。参加して中国の歴史や文化、言語への興味が増したのは言うまでもなく、日本側からは中国側の学生らに何ができるだろうか、とも考えることができた。相手から何かをしてもらうというのはこちら側から何かしてあげたい、という気持ちの発現につながる。だからこそ、今回多くの人や町で様々な形でてなされたことは、日本側には貴重な経験と印象改善をもたらし、将来世代の日中関係の友好的な発展につながりうる意義があったものだったと思う。少なくとも自分はまた個人的に訪中したいと思えるようになった。

このような機会を設けてくれた中国側そして日中友好協会に感謝する。(1652 文字)

「私の目で見た本当の中国」

3-A 宇都宮大学 大柿心琴

「生きて帰ってきてね。」家族や友人に中国へ行くことを伝えたと、皆がこう口を揃えた。国内旅行や他国への訪問では「楽しんできてね。」と言われることが多いが、今回は違った。衛生面や盗難、盗聴、感染症、詐欺、事件など、さまざまな心配が寄せられた。メディアの報道やSNSでは中国のネガティブな部分を取り上げられることがあり、印象はあまり良くないのが現状であると考えた。しかし、私は大学の授業で「自分の目で見たもののみが真実である」と学んだ。そのため、今回の訪中を通じて、中国の現実を自分の目で確かめ、家族や友人に伝えることで、現在のネガティブなイメージを払拭したいと考えた。

訪中では上海、山西省の大同・太原、そして北京を訪れた。その中でも特に印象に残ったのは、現地の学生との交流である。山西大学のキャンパスを案内してくれた学生は、日本語を学び始めてわずか半年にもかかわらず、驚くほど流暢に話していた。彼女は日本のアニメが好きで、好きな作品の話で盛り上がった。日本のアニメ文化が中国の同世代にも親しまれていることを実感し、嬉しい気持ちになった。また、構内のカフェでドリンクとクッキーをご馳走してくれたことも印象的だった。微信を交換したのでこれからも連絡を取り、彼女たちが日本を訪れる際には、私がぜひ何かを奢って出迎えたいと思った。中華人民大学外国語学院との交流では、日本の楽曲「Seacrest Base～君がくれたもの～」を披露してくれた。この曲は私の好きな曲であり、中国の学生が日本語で歌ってくれたことがとても感慨深かった。

渡航前、家族や友人はホテルの安全性や食事について心配していた。しかし、宿泊した4か所のホテルはどこも想像をはるかに超える豪華さだった。シャワー室がガラス張りであったり、トイレにドアがなかったりしたことには驚いたが、それ以外は何不自由なくくつろげる空間だった。ベッドや水回りも清潔に保たれており、快適に過ごすことができた。友人から盗撮や盗難、トコジラミに気をつけるよう言われていたが、そのような不安を忘れてしまうほどの清潔さだった。

食事についても同様だった。渡航前は友人や家族に「何の食材が使われているかわからなくて不安」「お腹を壊しそう」「美味しくなかったら残してね」と言われていた。しかし、実際に本場の中華料理を食べてみると、どれも絶品だった。日本で食べる中華料理は味が濃く、辛いものが多いイメージがあり不安だったが、現地の料理は想像以上に美味しく、食べるのが楽しくなっていった。しょっぱいと思って口に運ぶと甘かったり、初めて味わう食感のものがあつたりと、ひとつひとつの料理が新鮮だった。最初は何が使われているのかわからず警戒していたが、回数を重ねるうちに「未知の料理を試してみること」に楽しさを感じるようになった。思わずつい食べ過ぎてしまうほど美味しかったことが印象に残っている。この経験を通じて、思い込みで否定するのではなく、まずは挑戦し、自

分の五感で確かめることの大切さを学んだ。

今回の訪中を通して、私の中国に対する印象は大きく変わった。現地の学生やガイド、レストランのスタッフたちの温かい歓迎から、日本に対する好意を感じた。クルーズ船やバスから見えた上海や北京の夜景は、きらびやかに輝き、先進的な都市の発展を実感させた。さらに、大同や太原では、教科書で見た歴史的な展示物や石窟、壮麗な建築物を実際に目の当たりにした。悠久の歴史を刻む遺跡と近未来的な都市の発展が共存する光景は、まさに中国の奥深さを象徴しているように感じた。

また、私にとってさらにオープンになる契機となった。「わからないものを一度試してみること」の大切さを学んだ訪中。私は、そこで感じたものを「私が見た本当の中国」として家族や友人に伝え、これまでの否定的なイメージを払拭したい。そして今後も日中友好の架け橋となるべく、まずは身近なところから中国の魅力を発信していきたい。この訪中は様々な箇所を巡った。この機会がなければ一生この土地に自分の力のみで来ることはなかったであろう。そしてここまで深く中国に関心を持ち、理解することはなかったであろう。この貴重な経験をさせてくださった関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

多様な文化の中で、自分を見つめ直す旅
— 私が訪中から学んだこと —

3 班 A 創価大学

氏名 鎌田 伸行

五月下旬、私は訪中国の一員として、中国の上海、山西省、大同、北京という三つの都市を巡る研修旅行に参加した。異国の地での一週間は、目に映る風景の多様さ、人々の温かさ、そして深い歴史と文化の重みを五感で味わい、自分自身を見つめ直すきっかけとなる旅だった。

まず上海では、ジンマオタワーの展望台から広がる近代的な街並みと黄浦江の夜景に圧倒された。煌びやかな光の海は、中国の経済発展の象徴でもあり、そのダイナミズムを体感した。歴史博物館では六千年に及ぶ上海の変遷を学び、田子坊の伝統的な街並みでは、チャイナドレスの購入を通して中国文化の美意識に触れた。近代と伝統が調和する街の姿は、異なる文化が共存し調和する可能性を感じさせた。

次に訪れた山西省では、雲崗石窟の壮大な仏像群や華嚴寺、晋祠といった歴史的建造物を巡った。石窟に刻まれた精緻な彫刻は、宗教と芸術の融合が生み出した人間の営みの結晶であり、静けさの中に時の流れを感じさせた。平遥古城の街並みは、まるで映画のセットのようで、過去と現在が交差するような不思議な感覚を味わった。都市の喧騒から離れたこの土地では、自然と歴史が共鳴し合う独特の空気に包まれていた。

研修の中で最も心に残っているのは、山西大学や中国人民大学での学生交流である。現地の学生たちは日本語を自在に操り、アニメや文化への関心をきっかけに日本語学科を選んだと話してくれた。互いに異なる文化圏で育ちながらも、アニメや音楽といった共通の話題を通じてすぐに打ち解けることができた。交流の中で印象的だったのは、案内してくれた学生が私たちのためにドリンクを買いに走り、バスの発車間際に駆け込んで渡してくれた出来事である。その優しさに心を打たれ、人と人との関わりに国境は関係ないと実感した。

また、北京で訪れた万里の長城では、急勾配を登る中でその壮大さと歴史的意義を肌で感じた。北方民族の侵入を防ぐために築かれたというこの建造物には、中国の過去と未来が交差する強い意志が込められているように思えた。旅の中で都市ごとの文化や景観の違いを感じたことも、自分の視野を広げる経験となった。上海の近代的な高層ビル群と山西省の素朴な街並みの対比は、中国の持つ文化的多様性を物語っていた。

今回の訪中を通じて私が最も強く感じたのは、異なる文化に触れることで「自分自身を知る」ということだった。他者を理解しようとする過程の中で、自分が何に感動し、何を大切に思っているのかが浮かび上がってきた。文化の違いを超えて心が通じ合った瞬間、人と人とのつながりの本質を考えさせられた。これからも、出会った中国の学生たちとのつながりを大切に、日中の友好関係の一端を担えるような存在になりたいと思う。

最後に、この旅を支えてくださった佐々木団長をはじめ、日中友好協会の皆さま、そして共に時間を過ごした仲間たちに心より感謝を申し上げたい。多様な文化に触れ、自分自身と向き合う旅は、今後の人生において確かな指針となるであろう。(1240 文字)

日中友好協会 訪中国の感想

班：3A

大学名：法政大学

氏名：菊地啓斗

中国を訪れて、私は山西省、上海、北京の三つの都市を巡りました。それぞれの都市で全く異なる文化や雰囲気に触れることができ、とても貴重な体験となりました。そこで経験した様々な、思い出を感想として、提出したいと思います。

まず、山西省では「雲崗石窟」を見学しました。これまで教科書や写真でしか見たことがなかった仏教遺跡を、実際に自分の目で見ることに深い感動を覚えました。巨大な石窟の中には数多くの仏像が彫られており、それぞれが非常に繊細かつ荘厳な雰囲気を持っていました。1500年以上も前にこのような大規模な芸術が作られていたことに、当時の技術力や信仰の深さを感じました。また、現地のガイドの説明を通して、単なる観光地としてではなく、文化財としての意義や歴史的背景をより深く理解することができました。石窟の空間に立ったとき、自分が歴史の一部に触れているような、静かな感動に包まれました。

次に、近代的な都市である上海について話したいと思います。ここでは黄浦江のクルーズに参加し、美しい夜景を楽しみました。川の兩岸に立ち並ぶ高層ビルがライトアップされ、まるで未来都市にいるかのような景色が広がっていました。特に印象的だったのは、上海タワー付近から眺めた夜景です。古い西洋建築と現代的なスカイスクレーパーが共存しており、伝統と革新が調和する独特の雰囲気を醸し出していました。街の中を歩くと、国際的なブランドやレストランが立ち並び、多様な文化や人々が共存する上海のエネルギーを肌で感じることができました。都会的な洗練さの中にも中国らしい人情や活気が感じられ、非常に魅力的な都市でした。

最後に訪れたのは中国の首都・北京です。ここでは現地の大学生との交流会に参加しました。この交流は、今回の旅の中でも特に印象深い経験となりました。中国の若者たちと直接対話することで、ニュースや書籍からは知ることのできない現実の生活や価値観に触れることができました。彼らはとても親切で、積極的に私たちに話しかけてくれました。共通の趣味や音楽、映画の話題で盛り上がり、お互いの国の教育制度や将来の夢について語り合ったりする中で、文化の違いを超えたつながりを感じることができました。交流を通して、中国の若者が抱えている夢や努力の姿勢にも大きな刺激を受け、自分自身もっと広い視野を持って学んでいこうという意欲が湧きました。また、その大学で、現地の方々が披露してくれたパフォーマンスまさに圧巻でした。

この旅行を通じて、中国という国が持つ多様性、歴史の深さ、そして今もなお発展を続けている姿に強い印象を受けました。山西省の伝統的な遺産、上海の現代的な都市文化、北京での国際的な交流、それぞれが私にとって新たな学びと感動を与えてくれました。今回

の経験は、今後国際的な視点を持って行動していくうえで、かけがえのない財産となると確信しています。こうした経験がお互いの国民にとって、平和を広げる礎になることを願うとともに、自分もその一部になれるような、人材になりたいです。

「中国で広がった世界とココロ」

3-A 班 十文字学園女子大学 小林 茉琳

今回、日中友好協会の大学生訪中団に参加し、中国を実際に訪れるという貴重な機会を得ました。訪問を通じて、自分の中にあった中国に対する偏見がそのままだった部分があれば、見事に覆されたものもあり、また新たに学ぶことも多くありました。事前研修では「空気が汚い」「人が多くてマナーが悪い」「共産党国家だから少し怖い」などの意見が挙がりましたが、実際に中国の地に足を運び、自分の目で見て感じたことは、予想以上に多面的でリアルなものでした。

たとえば、空気の問題については、体感的にはやはり綺麗とは言いがたく、喉を痛めている人も多く見かけました。乾燥も強く、事前に聞いていた通りの部分もありました。しかし、人々の印象については大きく変わりました。案内をしてくれたガイドの方やホテルのスタッフ、街中で困っているときに声をかけた中国の方々は、皆さん本当に親切で、温かく接してくれました。共産党という言葉に漠然とした怖さを抱いていましたが、実際にはそのような恐怖を感じる場面は一切なく、人の優しさが心に残りました。

歴史に関する訪問も印象的でした。上海歴史博物館や華嚴寺、晋祠などに行くことで、これまで日本で学んできた歴史とは異なる、中国側の視点で物事を見ることができ、とても新鮮に感じました。特に、当時の建造物や貴重な資料を目の前で見ることで、教科書では味わえない臨場感と学びが得られ、歴史をより深く理解できました。

食文化に関しても、多くの驚きと感動がありました。毎日豪華な中国料理をいただき、鳩や蜂の巣など、日本ではなかなか口にできない料理にも挑戦しました。その中でも特に印象に残ったのは、牛肉とエリンギを醤油のような調味料で炒めた料理で、これが一番美味しかったです。他にも、北京ダックや刀削麺、蒸し物など、本格的な中華料理を思う存分堪能できました。

また、宿泊したホテルの食事も素晴らしく、ビュッフェ形式の朝食では、さまざまな味と出会うことができました。中でも驚いたのが、ビュッフェの中に麻辣湯をその場で作ってくれるブースがあったことです。日本では専門店に行かないと食べられない麻辣湯を、自分の好みでアレンジしながら食べられることに感動し、思わず日本の友人に報告したほどです。フルーツも非常に美味しく、スイカだけでなくマンゴーやドラゴンフルーツも楽しむことができ、中国にはフルーツのイメージがなかった私にとって新たな発見でした。

今回の訪中団に参加した目的のひとつに、「社会人になる前に、新しい出会いや価値観を得

たい」という思いがありました。現地で出会った仲間たちは、国際経験が豊富で、自分の目標に向かって挑戦し続ける姿が印象的でした。彼らとの出会いが私に大きな刺激を与え、留学や英語学習に対して再び前向きな気持ちになりました。かつては不安から迷っていた留学についても、改めて情報を集め、英語の勉強にしっかり取り組んでいこうと決意することができました。

1 週間という短い期間でしたが、3A のメンバーと寝食を共にし、たくさんの思い出と絆が生まれたことも大きな収穫です。この経験を通じて、自分自身の視野が広がり、価値観が豊かになったと実感しています。

最後に、このような貴重な経験をわずか 4 万円という費用で実現できたことに深く感謝しています。そして、ぜひ他の大学生にも、この訪中団に参加し、自分の目で中国を見て、感じて、学ぶという体験をしてほしいと思います。

「見て、知って、感じたこと」

3-A 東北学院大学 富樫美柚

正直なところ、中国を訪問する前は、中国に対してすごく良いイメージを持っていたかと言われたらそうではありませんでした。私たちが中国について知る手段は、教科書やニュースなど限られたものだけで、どうしてもその情報だけで中国を見ていました。しかし、今回の訪問で実際に現地に足を踏み入れ、自分の目で直接見た中国は私の知っている中国とは大きく違っていて驚きました。

私が最も印象に残っているのは中国の方々の温かさです。日本人である自分が現地でどう思われるのか最初は不安がありました。しかしこの7日間に関わったすべての方がとても優しく、私の拙い中国語にも真剣に耳を傾け、理解しようとしてくれました。中には日本語で「こんにちは！」と挨拶してくれたり、「日本人なの？日本のどこから来たの？」と気さくに声をかけてくれる方もいて、本当に嬉しかったです。こうした人々との交流を通して、日本にいただけではなかなか気づくことのできなかった中国の人々の優しさや温かさに触れることができました。

また文化や生活習慣の違いに触れる中で、違い＝分かり合えないことではないということにも気づかされました。食事のスタイルや街並み、言葉の響きなど当たり前のことですが、中国は日本との違いがたくさんありました。しかしそれらは決して分かり合えないことではないと思いました。始めは戸惑うこともありましたが、その環境の中で過ごすうちにそうした違いが新鮮で魅力的に感じるようになりました。日常の中のちょっとしたことでも中国のことを知ることができたら、中国をより身近に感じられるようになると思いました。

さらに今回の訪問を通して、日中の間にある「距離」についても考えるようになりました。物理的にはすぐ隣の国でありながら、私たちは中国についてあまりにも知らなすぎるのではないかと思いました。今回、現地の方々が日本に対して関心を持ち、親しみを感じてくれていると思った場面はたくさんあります。国と国という関係で考えるとそう簡単なものではないのかもしれませんが、人と人という関係で考えたら、互いにもっと歩みよれる可能性があると感じました。

この7日間の訪問は私の人生の中で忘れられない思い出になりました。実際に中国に足を運び、人と出会い、自分の目で確かめることでしか得られないものがたくさんありました。そして「見ること」の大切さを実感する機会にもなりました。知識として知っている中国と、自分が行って感じた中国には大きな違いがありました。また、今回の訪問を通して、もっと自分自身の視野を広げたいと強く思うようになりました。短い期間であっても、異なる文化や価値観の中に身を置くことで、自分の中にあった固定概念がほぐれていくのを感じました。先入観を持ち色眼鏡をつけて中国を見るのではなく、自分の目で見て聞いて感じたことを大切にしたいと思いました。

帰国後、ニュースで中国についての話題を見るとき、他人事ではなく自分が知っている場

所や人々のこととして考え見るようになりました。今後、もっと多くの人に中国の本当の姿を知ってほしいと思いますし、誰かが「中国ってどんな国だった？」と聞いてきたら自分が見て、知って、感じた中国を自分の言葉でしっかり伝えたいです。

自分自身で”見て”・”知って”・”考える”ことの大切さ

3A 班 大阪公立大学 中尾 壮良

今回の訪中を終えて考えたことを主に3つに分けて述べます。

1 点目は、訪中前後の中国に対するイメージの大きな変化です。正直に言うと、訪中前、中国に対してあまり良いイメージを持っていませんでした。これは、メディアによる偏見報道を鵜呑みにしてしまっていたことや、日本人の知人と中国について話す際に、ネガティブなイメージが無意識に共通認識となっていることが原因でした。しかし実際に中国を訪れてみると、上海や北京のような国際都市では、人が多いのにもかかわらず治安も良く、街も綺麗で驚きました。また、上海は特に、街で見た中国の方は比較的穏やかで、話しかけても優しく対応してくれたことが強く印象に残っています。テレビやインターネットのようなメディアでは、政治的な意見の違いから、国民感情レベルで相互に否定的なイメージが報じられがちです。だからこそ、固定概念に縛られず、実際に現地を訪れて人々と直接交流することの重要性を感じました。

2 点目は、上海や北京、山西省を実際に訪れて感じた、経済・産業、文化・歴史における日中の深い関わりについてです。まず、経済や産業について述べます。最も印象に残っていることは、上海の発展具合です。上海金茂ビルの周辺にバスで降り立った時や黄浦江遊覧の時間に、上海の街を一望してみると、高層ビル群がひしめき合い、経済大国の凄まじい勢いを肌で感じました。また、上海の高層ビルは過去 30 年で急速に増加したということを知り、驚愕しました。他にも、中国の製品に着目した時、日本の製品や日本の企業名を目にすることが多くありました。例えば、ホンダやトヨタなどの自動車や三菱電機が製造するエスカレーターを見て、重工業製品において日本の技術が広く使われていることを知り、日中が輸出入で互いに依存し合っていることを実感しました。次に、文化・歴史について説明します。文化については、箸を使う文化や米文化から、特に食事面において日本が影響を受けていることが多いという印象を受けました。歴史についても同様に、日本との関わりを感じました。具体的には、山西省で訪れた平遥古城で、日中戦争の時に日本軍が攻めた形跡を見たことです。今回のプログラムで、中国の歴史を知ることによって、日本だけでなく世界の情勢理解にも繋がると感じました。

3 点目は、日本人学生や中国人学生との交流を通じて得られた学びです。まず、日本人学生との交流について述べます。日中友好大学生訪中団には 92 名の学生が参加しており、北海道から九州の大学に在籍する色々な学生が参加していました。私自身は関西在住で、関東や東北、北海道の学生と交流する機会が普段はあまりないため、進路や日常生活、課外活動の話などを聞き、一週間を共に過ごしたことは非常に刺激的でした。次に、中国人学生との交流について説明します。中国人学生と実際に交流して、日本人の大学生が中国語を学ぶ人が多いように、中国人学生も日本語を学び、日本文化や日本の歴史に興味を持っている人が多いことを知りました。また、勉強に熱心に取り組み、教養を深めようと努

力している中国人学生の姿を見て刺激を受けました。

今回の訪中は初めてで、二次情報を鵜呑みにするのではなく自分自身で実情を確かめることの大切さや、歴史を学び教養を深めることの大切さを実感しました。政治上では日本と中国は異なる方針であるため、特にメディア上で、相手国のことをネガティブに表現されることが多くあるかもしれません。しかし、固定観念を持たずに現地を訪れることで、新しい発見や好感を抱く経験がきっとできるはずです。今回のプログラムを通して、民間交流を促進し、両国民が互いに理解する姿勢を持ち続けることが、今後の日中関係を考える上で必要だと感じました。

このように貴重な体験と多くの発見ができる機会を提供していただき、心より感謝申し上げます。

訪中を通しての中国に対するイメージ変化

3-A 班 横浜国立大学 中庭知子

今回訪中国に参加して、私が感じたことは大きく分けて三つある。

一つ目は、想像以上に歴史豊かな国であるということだ。私自身、高校の時に世界史を履修していて、中国史について大まかに知っていたし、ほかの地域の歴史より詳しい自負があった。しかし、今回訪れた雲崗石窟や平遥古城などで聞いたこともなかった語句や知らなかつた事実を知り、新たな驚きや発見がたくさんあった。ガイドさんの知識も豊富で疑問に思ったことは何でも答えてくださり、とても勉強になった。特に印象に残っているのは雲崗石窟だ。想像していたものと全く違い、とても広いうえに彫刻が細かく天井の高いところまで施されており、圧倒された。彫刻途中のものもあり当時の人々の苦勞を垣間見ることができて感動した。平遥古城も歴史を感じる街並みで大変心地よかつたまだまだ知らない歴史がたくさんあると思うのでぜひ勉強したい。

二つ目は、技術や経済がとても発展しているということだ。私のイメージとしては、街中にはごみが落ちていて、古びた高層マンションが連なっているというものだった。しかし、上海でクルージングをしたときにきらびやかな景色に魅了され、このイメージを覆された。会社の壁一面がアートになり光っていたり、「I♡上海」などとかかれ、上海らしさも感じたりすることができた。また、まちを歩いていてもごみはあまり見当たらないし、ひどく汚れた様子もなく、きれいな街だった。中国のお金の大きさを間近で見て、日本との圧倒的な差を実感した。今回の旅では田舎などに行かなかつたので、いずれそういうところにも訪れて中国の都会と田舎の差や、日本の田舎と中国の田舎の違いについても知りたいと考えた。三つ目は、人々がやさしいということだ。山西大学との交流や青年友好大会などを通して、間近で中国の人々に触れ、優しさを感じた。日本語で話してくれようとしたり、おすすめの観光地や、大学内のパン屋さんや飲み物屋さんに入れて行ってくれたりして、短い間だったが濃い交流をすることができた。観光地では、グッズをとんでもない価格で売り付けられそうになったり、渋滞したときにバスを後ろからたたかれたりしたが、全員がそうでないことを再確認できた。

これらの感じた三つのこと以外に、トイレ事情について考えたので、それも述べたい。今回の旅では、ホテルや訪れた会食場以外の街中や観光地でのトイレの汚さには毎度驚いた。ティッシュを流せないというのは知っていたが、それが理由で日本のトイレの壁に使用済みトイレットペーパーは流してくださいという張り紙があるのだと知った。いつもは流している自分も中国のルールにならうのは大変だったし、相手もそうだと考えるのでこれから訪れる場所でも気を付けたいと思った。

最後に、今回の中国への一週間の旅は、私の人生にとって、とても良い経験になったと考えている。普通の旅行では行けない日程と場所、参加できない行事などとても貴重な体験をさせていただいた。現地の学生や人々との交流を通して「中国」を肌で感じ、中国や中国人へ

の理解をアップデートできたと考えているし、これからも相互理解を深めていきたい。

「訪中を終えて考えたこと」

「相互理解」

3A 北陸大学 阿部汐栞

私は大学で中国語を専攻しており、日頃から中国の言語や文化、歴史について学んできた。その中で、中国に対する興味は次第に深まり、「いつか自分の目で中国を見てみたい」という思いを強く持っていた。一方で、私の家族や周囲には、中国に対して否定的な印象を持っている人も少なくなかった。「危ない国なのではないか」という声や「マナーが悪いのではないか」といった声を聞くたびに、違和感を抱いていた。だからこそ、今回の訪中プログラムは、大学で学んできた中国文化や人々の姿を、自分の目で確かめる貴重な機会だった。

この7日間で訪れた、上海、山西省、北京は、どこも深い歴史と豊かな文化にあふれていた。上海でのナイトクルージングでは、ライトアップされたギラギラとした街並みの美しさに感動したとともに、近代都市としての中国の姿を感じ、中国の発展と勢いを肌で感じた。山西省の平遥古城では、明や清の時代の街並みに触れ、時代を超えて残る人々の暮らし

を感じた。雲岡石窟では、巨大で精巧な仏像の影刻に圧倒され、中国の宗教芸術の奥深さに魅了された。約1500年前に造られた雲岡石窟がこれほどまでに美しい状態で現代に残されていることに驚かされた。北京の万里の長城では、実際に登ってみて、写真や映像では伝わらない壮大さを全身で感じた。こんな場所に、どうやって、これほどのものを造ったのか、当時の技術や労働の実態についてより興味を持った。

そして一番心に残っているのは、現地の大学生たちとの交流である。文化交流会では、太極拳の演武や伝統劇、踊りや歌の発表があり、どれも自国の文化と誇りをもって披露する姿が印象的だった。私たち日本の学生も、書道、歌やダンスの発表を通じて日本文化の魅力を伝えることができた。中国人学生との交流では、自分から中国語で積極的に話しかけるように心がけたところ、「中国語、上手ですね!」「もっと話したいです!」と笑顔で返してくれたことが本当に嬉しかった。言葉が通じたことで一気に距離が縮まり、互いに自然と心を開くことができた。何人かの学生とは連絡先も交換し、帰国後もメッセージのやりとりが続いている。今までの学びが実際の交流につながったことに大きな達成感を感じた。

今回の訪問を通して、私は「まず相手を知ろうとすること」「実際に会って対話すること」の大切さを痛感した。日本と中国は文化的にも歴史的にも深いつながりを持つ隣国であるからこそ、誤解や対立ではなく、若い世代が交流を通して理解を深めることが今後ますます重要になってくると感じた。この7日間での経験で私自身の視野と考え方は広がったと思う。これからも中国語の学習を続けながら、今回の経験を活かして、互いを理解し合える関係を築いていきたい。そして、ネットやテレビの報道では見えない中国の人々の温かさや思いやりに触れた経験を自分の言葉で周囲に伝えていくことで、周りの人が持つ中国に対する考え方も変わり、より良い関係の構築に貢献したいと思う。

今回、日中友好協会青年代表団の一員として1週間にわたり中国（上海、山西省、北京）を訪れた。この経験を通じて、私の中では中国に対する認識が大きく変化した。

変化は大きく二つの側面—マクロ（国家・社会）とミクロ（人々）—に現れている。

まず、マクロ的な側面では、中国という国の多面性と奥行きを体感した。私は訪中前、中国は都市全体が最新技術で効率化された「ハイテク国家」というイメージを持っていた。実際、上海や北京といった大都市のみならず地方都市においても、アプリによる電子決済が広く普及しており、日本よりも進んでいると感じた。また、高速鉄道の改札では顔認証などの自動認証システムが導入され、セキュリティ面においても先進的な印象を受けた。一方で、意外だったのは公衆トイレをはじめとする水回り設備の多くが未だに手作業に頼っており、清掃員が常駐している点である。当初はそのギャップに驚いたが、現地の方から「これは雇用を生み出すための仕組みでもある」と聞き、中国社会の合理性とは異なる価値観や制度設計の存在に興味を持った。また、古城では今もなお人々が実際にその歴史的な街並みの中で暮らしているという話を伺い、現代的な都市開発と、伝統的な文化やアイデンティティの共存という、中国ならではの「二面性」を強く感じた。中国は単なる近代国家ではなく、多様な価値観と歴史的背景が共存しているダイナミックな社会であるということに気づかされた。また、街を歩く中で、至るところに国家のシンボルやスローガンが掲げられているのを目にし、人々の会話からも、強い愛国心が感じられた。同時に中国の人々は、自国の伝統や歴史、文化に対する知識が豊かである。一方で、自分は果たして日本についてどれほど語れるだろうか、という自省の念を覚えた。日中友好を考える上では、まず自国について深く知り、自分の言葉で伝えられるようになることが、相手国との対話の第一歩なのではないか。そうした気づきもまた、今回の訪中で得た大きな収穫である。

次に、ミクロ的な側面、つまり中国の人々に対する印象の変化がある。

日本国内では、報道などで中国人に対するネガティブな情報が取り上げられることが多く、私自身も無意識のうちに距離を感じていた部分があった。しかし、今回の訪中でその先入観が大きく覆された。山西大学や中国人民大学で現地の学生たちと交流する中で、日本に対して強い関心と好意を持ってくれていることを実感した。「日本のアニメがきっかけで日本語を学び始めた」「日本の文化に憧れている」と話す学生も多く、言語や文化を通じて日本に歩み寄ろうとする姿勢が印象的だった。私たちが中国語に不慣れであっても、笑顔で接してくださり、言葉の壁を越えた温かい交流がそこにはあった。むしろ、偏見を持っていたのは私たち日本人の側だったのではないかと、痛感する場面も多かった。

こうした経験を通して私が強く感じたのは、政治的な立場や歴史認識において完全に理解し合うことは難しいかもしれないが、文化を通じた民間レベルでの相互理解の可能性は大きいにあるということだ。特に、これからの未来を担う若者同士の交流こそが、信頼関係の礎となるだろう。国家間の関係が複雑化する今だからこそ、顔を合わせ、言葉を交わし、互い

の文化を尊重し合うことが重要である。そして、それは報道やインターネットの一面的な情報だけでは得られない、「現地で自分の目で見て、肌で感じること」から始まるのだと思う。今回の訪中は、まさにその「始まり」に立ち会った経験であると言える。